『トリストラム・シャンディ』第1巻 第20章中の原注のレイアウトについて

山 内 暁 彦

序

ロレンス・スターン（Laurence Sterne）の『トリストラム・シャンディ』（*Tristram Shandy*）には、書物としての外観において他には見られない様々な特色がある。真っ黒なページ（第1巻 第7章）、真っ白なページ（第6巻 第38章、第9巻 第18、19章）、マーブル模様のページ（第3巻 第37章）などが特に目を引く。さらには、作者による話の筋の進み具合の図示（第6巻 第15章）、トリム伍長が杖で空中に描いた軌跡（第9巻 第6章）といった、文字以外の図版の挿入も同様である。これらと並んで、多少地味であるが、この著作には、筆者として想定されているトリストラム自身による注釈が、原注としていくつも挿入されていることにも注目すべきである。それらの原注は、長短合わせ全体で10箇所以上に上る。

本論では、とりわけ、第1巻の第 20 章で挿入される、Memoire presenté a Messieurs les Docteurs de Sorbonne「ソルボンヌの博士たちに提出せられたる覚書」と Réponse「回答」（以下、それぞれ Memoire、Réponse と略記する。）を導入するための長い原注に注目し、作品の本文と原注とがレイアウト上いかなる関係にあるかを論じることを通じ、一見何の目論見もなく思うに任せて書かれたかに見える『トリストラム・シャンディ』が、実際にはいかに周到に考え抜いて書かれた作品であるかを改めて示したい。その際、各種のテキストを参照するが、その過程でいかに多くの現行のテキストが作者の当初の意図に沿っていない、錯綜したレイアウトになってしまっているかが明らかとなるであろう。そして、このような不具合が起こってしまう理由を、横書きで印刷される洋書が通例取る、脚注の形式に求めつつ考察するとともに、この作品の日本語訳におけるレイアウトが、縦書きで印刷されているため、結果的に作者の意図に沿ったものとなり得ているという事実も指摘したい。最終的には、作品の初版に見られる原注のレイアウトが他に類のない形態になっていることに着目し、これまで見落とされて来たに違いない作者の当初の意図がどのようなものであったかを指摘したい。

I

『トリストラム・シャンディ』の第1巻 第20章は、'—How could you, Madam, be so inattentive in reading the last chapter? I told you in it, *That my mother was not a papist.*'（どうしてまあ奥さま、あなたはすぐ前の章をそんなにうわの空で読んでいらしたのです？ 私の母はカトリックではなかったと申し上げたではありませんか）と唐突に始められる。[1] そして、トリストラムの母親がカトリック教徒だったかどうかという点が問題にされる。その第3パラグラフの最後には、'Had my mother, Madam, been a Papist, that consequence did not follow.'（65）（奥さま、もし私の母がカトリックであったなら、（名前をつけてもらう前にまず生まれねばならないという）結論は出てこない）と書かれている。言い換えると、「母はカトリックではないから、名前をつけてもらう前にまず生まれねばならない」と言うのである。母親がカトリックであるか否かということと、子供（トリストラム）の命名と出生の順番とが問題にされているのだが、どうも要領を得ない印象である。

そこで、その前の第19章から見てみよう。第19章では、トリストラムという名がいかに悪い名であるかということに関しての父ウォルターの心情が語られ、名付けが中心的な話題となっているのであるが、章末に 'I should be born before I was christened'（64）（洗礼を受け名をつけてもらう前に私はまず生まれねばならない）とごく軽く述べられている。そこで読者は、次の第20章で主人公が生まれると思いきや、この作品ではしばしば起こることであるが、そうはならず、まず「奥さま」と、仮想的な読者への呼びかけがなされ、次いで彼女に対して、前章をよく読んでいなかったのかという問いかけがなされる。さらには「第19章全体を読み返せ」という趣旨の指示が彼女に向かって与えられる。この後彼女は第19章に戻り、そこを読み返してから再び第20章に戻って来たことになっている。一方、われわれ一般の読者は、彼女が「中座」している間に作者の言葉を、'I have imposed this penance upon the lady'（65）で始まる第2パラグラフの分だけ聞いていることになる。当の「奥さま」が戻って来ると、'—But here comes my fair Lady.'（65）（・・・ですが奥さまが戻ってこられました。）という文言で新たなパラグラフ（第3パラグラフ）が始められる。その最後の箇所でようやく、「もし母親がカトリックであったなら、（名前をつけてもらう前にまず生まれねばならないという）結論は出てこない」ということが、言明されるという流れになっているのである。

Then, Madam, be pleased to ponder well the last line but one of the

chapter, where I take upon me to say, "It was *necessary* I should be born before I was christen'd." Had my mother, Madam, been a Papist, that consequence did not follow. (65)

(では、奥さま、その章の最後から2行目をよく考えてご覧なさい。そこで、「名前をつけてもらう前にまず生まれることが必要である」と言ってあります。奥さま、もし私の母がカトリックであったなら、そういう結論は出ては来ません。)

しかし、これはわれわれ読者に対するちょっとした意地悪以外の何物でもない。「奥さま」にとってもそうであるし、彼女とは別行動をとったという想定のわれわれにとってもそうだ。なぜなら、第20章の冒頭の 'I told you in it, *That my mother was not a papist.*' (64) (私の母はカトリックではなかったと申し上げたではありませんか) という言葉を文字通りに受け取れば、これと同じ文言を第19章中に探すことがわれわれ読者の自然な反応であるからである。にもかかわらず、実際には、第19章にはそうした文言はない。その代わりに「名前をつけてもらう前にまず生まれねばならない」という言葉がその答えとして挙げられるのであるからだ。確かにそうした文言はある。だが、おそらく多くの一般の読者も「奥さま」と同様に第19章を読み返して 'papist' (カトリック) という言葉を探すであろうし、わざわざ読み返さないまでも、少なくとも、「カトリックではなかった」ということが書かれていたかどうかを思い出そうと努力し、思い出せないことに引っかかりを感じるはずであるのだ。もちろん、こうした当惑の感覚を多くの読者に持たせようとしているのが作者の意図なのであろうが、失礼な感は否めない。

とりわけ、読者が、キリスト教徒でなく、カトリックでもアングリカンでもない場合はなおさらそうだ。その理由は「名前をつける」という言葉の意味についてわれわれは十分承知しているとは限らないからだ。われわれ日本人の多くはキリスト教徒ではない。従って、子供に名をつけるのは子の出生の前であろうが後であろうが大した問題はない。出生届に間に合いさえすれば良いのだ。これに対してキリスト教徒では、名前をつけるということは即ちクリスチャンネームを付けるということに他ならない。命名は洗礼という重要な儀式と一体の大事なのであるということを知らずして、「出産」と「命名」の順番に関する問題に存する真の意味は理解不能である。では、読者が、アングリカンやカトリック、あるいはその他の宗派のキリスト教徒であったらどうだろうか。命名と出生の順番についての宗派による違いにまつわる議論は十分に理解されたであろうか。筆者はそうは考えない。読者によっては良く理解できない論法を補うために必要だと考え

た作者スターンによって、あえて小説には不似合いな原注がここで挿入されているのだと考えるべきなのだ。

では、その原注は一体どのようなものであろうか、詳しく検討して行こう。第20章 第3パラグラフの最後に、'Had my mother, Madam, been a Papist, that consequence did not follow.' (65) と書かれたところで、原注があることを示すアステリスクが打たれる。原注は、'The *Romish* Rituals derect the baptizing of the child in case of danger, before it is born. . .' (65) (ローマカトリックの儀典書は、子供に危険のある場合、生まれる前に洗礼を行なうことを命じている) と物々しく始まるが、作品が出版された当時の読者として想定されている一般的なアングリカンの読者はもちろん、多くのカトリックの読者も、それ以外の宗派の読者も、「ローマカトリックの儀典書」なるものはおそらく直接目にすることはないであろうから、この原注は、その後の本文と同等あるいはそれ以上の重要性を持っていると考えられる。作者は原注を挿入することによって、それまでいかにも無理な要求をして来たことについて、読者に対して説明責任を果たそうとしていると考えられるのだ。およそ小説の中には不似合いな、注という学術的な書物の意匠を取り入れることで、今ひとつ要領を得ない理屈に一定の説明を与えようと作者は試みているのである。

また、この原注は、Memoire と Réponse を導入するための前置きの役をも果たしている。ソルボンヌの博士たちが議論した結果、産婆の権限を拡大し、従来はトマス・アクィナスも無理だと考えていた、未だ母親の胎内にある胎児に小さな注射器で洗礼を施すということが可能になったという、ことの概略が、原注の中で前もって提示されているのである。原注に次いで、Memoire と Réponse が置かれている。Memoire は「覚書」というよりはむしろ「質問状」と言うべきものであり、注射器の使用が合法かどうかについて質問される。そして Réponse の中では、質問に対する回答として、ソルボンヌの博士たちによって実際に行なわれた議論の詳細が報告されている。緊急の場合の洗礼方法、即ち小さな注射器を胎児に対して用いることの是非が事細かに論じられる。

ここの部分は Memoire と Réponse を通じて、英語ではなくオリジナルのフランス語で表記されている。一方、原注は、本文と同じく英語で書かれている。原注は、読む者によっては難しいフランス語の部分を要約した形にもなっている。Réponse の後の原文は再び英語に戻って、1パラグラフを費やしてトリストラム自身の諧謔的なコメント、すなわち、母親にではなく男親の体内のホムンクルスに前もって洗礼を施してしまってはどうだろうか、という趣旨の冗談めいた提案が付け加えられて第20章は奇妙な感じを残しつつ終わることになる。

ところで、朱牟田夏雄訳の『トリストラム・シャンディ』に付けられた訳者注に以下のような記述がある。「ここは脚注のはずだが、以下、「ソルボンヌの博士たちに提出せられたる覚書」以下は、原本でも本文扱いになっている。」[2] 明確に指摘されているわけではないが、ここで訳者が言わんとしているのは、「本来 Memoire と Réponse は脚注の一部であり、本文に含めるべきではないにも関わらず、原文では本文扱いされているのでそれにならい、自分の訳書でもそのような表記法をとる、すなわち Memoire と Réponse の活字の大きさとその組み方は、原注のように小さな字で字下げして組むのではなく、本文と同じ組み方にする」ということなのであろう。Memoire と Réponse も注の一部であるとする考え方には一理あるが、本論の筆者はこれに組みしない。Memoire と Réponse とは、『トリストラム・シャンディ』という作品の中に取り込まれた、トリストラム以外の人物に由来する雑多な文章の一例であり、立派に本文の一部分を構成しているからだ。これに対して、原注は、まさしくトリストラム本人の文章であると言えるのであるが、それは、'The *Romish* Rituals derect the baptizing of the child . . .' で始まり、'it is as follows.' という文言で終わっていると考える。また、Memoire と Réponse は原注には含めず、あくまでも本文として扱う。以上のことを始めに断っておきたい。

II

ではここで、現在、比較的容易に入手することが可能ないくつかの版によって、この原注のレイアウトがどのようになっているか具体的に見てみよう。

まずは、作品のテキストだけでなく批評も収録されていて、学習者にとって便利の良い Norton 版はどうか。[3] この版の特徴は、注釈が本文と同じページに脚注として記されていることだ。注釈が巻末にまとめられている版の場合だと、それを見るためにいちいち巻末を見なければならないのに対して、本文と同じページを見ているだけで済むのでこの点は具合が良い。ただし、われわれが扱っている第1巻 第20章の原注については、これが欠点となってしまっている。原注が編者による数多くの注釈の中に完全に紛れ込んでしまっているのだ。注番号さえ「注8」の番号が振られていて、編者による注と通し番号になってしまっている。わずかに注の末尾に［*Sterne's note.*］との但し書きがあるものの、これでは具合が悪かろう。注といえどもこの原注は別格であり、本文と同様の重要さがあると考えるからだ。

原注の全体は、'it is as follows.'（それは次の如くである。）という文言で終わる。それとともにこのページも終わるが、次の頁をめくると、これは当然のことであるが、まず本文が印刷されている。それは、'It is terrible misfortune for this

same book of mine,' で始まるパラグラフの途中からだ。次いで、'I wish the male-reader has not pass'd by many a one,' で始まるパラグラフの全体が記されて後、Memoire が始められ、これに Réponse が続くというレイアウトになっている。原注の末尾で、'it is as follows.' と述べられている以上、本来は Memoire が原注の直後にあらまほしいのだが、残念ながらそうはなっていない。ノートン版のレイアウトは特に何の工夫もなくなされているという印象である。ノートン版で評価すべき点は、Memoire と Réponse に英訳がついている点だが、これらも全て小さな字で脚注の部分に無理に押し込められていて大変見づらい。全体的にノートン版は今ひとつの感がある。

次に、Everyman's Library 版を見てみよう。[4] この版の特色は、大変シンプルな構成にある。いろいろ付けてしまいがちである編者による注は全く付けられておらず、テキスト本文のみによって構成されているのだ。従って、原注が編者注とまぎれるというノートン版で見られたような問題は、最初から生じる余地はない。しかしながら、編者注がないため、Memoire と Réponse に英訳は付けられていない。これは残念と言えば残念である。では、第 20 章の原注のレイアウトはどうか。63 ページの中程から '—But here comes my fair Lady.' で始まるパラグラフが書かれている。そのパラグラフの末尾にアステリスクが打たれて、直後のページ下部に 'The *Romish* Rituals derect the baptizing of the child . . .' と原注がかなり小さな字で記されて、ページの最下部に至る。だが、原注は全体の約半分しか記されず、残りの約半分は頁をめくった次の 64 ページへ送られている。原注の前半は 63 ページの下部に、後半は 64 ページの下部に、分割されているのだ。長い注を分割して複数のページに掲載するという印刷法自体は、特に問題ないように思える。ただし、64 ページには、'It is terrible misfortune for this same book of mine,' で始まる本文のパラグラフが、その冒頭から記され、次いで、'I wish the male reader has not pass'd by many a one,'で始まるパラグラフの全体が記されて後、Memoire が始まっているので、原注の末尾の 'it is as follows.' という文言と Memoire とのつながり具合はやはり良くない。'it is as follows.' という原注の最後の文言の上方に、Memoire の表題が掲げられているため、読む順序が少しさかのぼることになって、「次に続く」という感じがしないのだ。

その上、読者を戸惑わせることがある。それは、Memoire の表題に付く別の原注である、*Vide Deventer, Paris Edit. 4to, 1734, p.366. が、'it is as follows.' という文言の直後に印刷されていることである。よく見ないとこれら二つの注が一つに連続しているように見えてしまうのだ。*Vide Deventer . . . の原注が、

ここ、64ページにある理由は、Memoire が同ページで既に始まってしまっていることにある。もし、Memoire の始まりが、さらに次のページであれば、Memoire の表題につく*Vide Deventer . . . の原注も当然次のページに書かれることになり、混乱は起きないのだが。

エブリマンズ・ライブラリー版で評価すべき点は、余分な編集者注を省いてある点だが、学習者の立場から考えると、ある程度の解説は読みたいものであるので、これは大きな利点とは言い難い。原注の文字のサイズは、一般の注として見れば適当な小ささだが、原注に本文と同等の重要さを認めようとするわれわれにとっては、小さ過ぎて見づらいと言わざるを得ない。パラグラフの字下げがない点や、通常の9巻構成でなく3巻構成としてある点は、この版独自の特色を出そうとしたものであろうが、これらも問題なしとしない。全体的にエブリマンズ・ライブラリー版は今ひとつの感がある。

次に参照するのは Oxford World's Classics 版である。[5] このオックスフォード版は、編集者の注釈が巻末に集めて収録されており、学習者は適宜巻末を参照しつつ本文を読むことになる。テキストとしては世間でよく見かける構成になっている。その 48 ページにわれわれが問題としている原注が掲載されている。編集者による注は数字で表され、原注はアステリスクで表されていて、両者がよく区別されている。48 ページの中程から '——But here comes my fair Lady.' で始まるパラグラフが書かれている。そのパラグラフの末尾にはアステリスクが打たれている。本文を2行はさんで、ページの下部に 'The *Romish* Rituals derect the baptizing of the child . . .' と原注がかなり小さな字で記されて、ページの最下部に至る。原注は、その全体がこのページ内に印刷されていて、次のページにまたがっていないことは良しとしたい。しかし、次の 49 ページでは、テキスト本文が15行書かれた後でないと Memoire の表題およびその本体は書かれていないという点が問題である。48 ページの最も下の 'it is as follows.' という文言から半ページ程度もある分量の本文を挟んでやっと Memoire が始められているのだ。原注の末尾と Memoire とが分断されてしまっているという点は、ノートン版と同様である。本来は Memoire が注の直後にあらまほしいのだが、そういうレイアウトを期待するのは無理なことなのだろうか。

このような疑いを抱きつつ、Penguin Classics 版を次に見てみよう。[6] この版もオックスフォード版と同様、編集者の注釈が巻末に集められている。編集者による注は数字で、原注はアステリスクで、それぞれ表されている点も同じだ。われわれが問題としている原注は、その 52 ページと 53 ページにまたがって記載さ

れているが、ちょうど見開きの左右に記載されていて見よいことは良しとしたい。また、'—But here comes my fair Lady.' で始まるパラグラフの末尾にアステリスクが打たれ、その直後に何も挟まず、'The *Romish* Rituals derect the baptizing of the child . . . ' と原注が始められている点も良い。しかし、原注の最後から Memoire に至るつながり具合がやはり問題である。エブリマンズ版に見られたのと同じ問題がこの版でも生じているのだ。即ち、53 ページには 'It is terrible misfortune for this same book of mine,' で始まるパラグラフが、その冒頭から記され、次いで、'I wish the male reader has not pass'd by many a one,' で始まるパラグラフの全体が記されて後、Memoire の表題が置かれ、それに続いて Memoire の本文が始められている。一方、原注は、52 ページの下部と 53 ページの下部にまたがって書かれているのであるが、その末尾の 'it is as follows.' という文言は、当然ながら、53 ページの最下部（最後の行）にある。従って、原注から Memoire へのつながり具合が良くない。原注から Memoire へ「続く」のではなく、上にさかのぼらねばならないのだ。オックスフォード版にせよ、ペンギン版にせよ、一長一短があるようだ。完璧なレイアウトを望むのは難しいことではないだろうかという印象がますます強まる。

では、最後の砦とも言うべきスターンの最も権威ある全集、Florida 版ではどうかを今一度見てみよう。この版の他に見られない特色は、何と言っても、複雑多岐にわたる編注がすべて別巻の 1 冊に納められており、テキスト本文のみが 2 冊に分けられ、余裕を持って印刷されていることである。そのため、原注は編者注とは区別され、本文と同じ分冊に印刷されている。このことによって、読者は多くの注釈に煩わされることなく本文に直接向き合える。それと同時に、原注が編注に埋没することなく本文と同等の扱いを受けているのを見ることにもなる。これこそが『トリストラム・シャンディ』という作品テキストの本来の姿であるはずなのだ。先に見たオックスフォード版やペンギン版の構成を見慣れた者の目には、このシンプルな構成はとりわけ新鮮に映るであろう。この版には、また、ノートン版やオックスフォード版と同様に、Memoire と Réponse に英訳が付けられているのだが、この点も学習者にとっては好ましい。

さて、問題の第 1 巻 第 20 章の原注はどうか。例によって、'—But here comes my fair Lady.' で始まるパラグラフの末尾には、注があることを示すアステリクが付され、その直後から 'The *Romish* Rituals direct the baptizing of the child . . . ' で始まる原注が記されている。アステリスクの直後に原注が開始されていて幸先が良い。原注が始まった後わずか 2 行でこのページ（65 ページ）は終わってしまい、原注の残りの大部分は頁をめくった次のページへと移る。次の

66 ページには、まずは本文の二つのパラグラフが印刷されている。一つ目のパラグラフも二つ目のパラグラフも、その全体がこのページに収まっており、他のページにまたがったりしてはいない。それらの下に原注の続きが計 13 行にわたって記されている。原注はその最後の部分、'If the reader has the curiosity to see . . .' 以下の 3 行が、別のパラグラフに分かれているが、この 3 行はそれ以前と少し間隔をあけて印刷されていて見やすい。この点は他の版には見られなかったことだ。原注の全体が、'it is as follows.' という文言で終わるのは、このページの最下部であり原注の下にはノートン版で見られたような余白はない。(マージンはあるが、それは他のページと同じ幅であって、このページだけ異なるということではない。)そして、次の 67 ページの冒頭に Memoire の表題が記され、それに続いて Memoire の本文が記されている。そしてその後には Réponse が続く。本文、原注、Memoire、Réponse の続き具合は、大変見事だと言う他はない。われわれは、ここでやっと理想的なレイアウトが実現されている版に行き当たったと言える。

III

『トリストラム・シャンディ』第 1 巻 第 20 章中の原注に関わるフロリダ版のレイアウトは、現代の他の諸版には見られない、大変につながり具合の良いものであることが分かったが、そもそも作者スターン本人は、印刷された作品に一体どのようなレイアウトを望んでいたのであろうか。そこで、そのことを調べるため、インターネットで閲覧可能な『トリストラム・シャンディ』の初版の様子を見てみることにしよう。[7] すると、まず、その版形の小ささと各ページの語数の少なさに驚かされる。例えば、第 1 巻 第 20 章中の 130 ページの場合だと、行数は合計 21 行しかないのだ。そのため、われわれが問題にしている原注は、いくつにも分割されることにならざるを得ない。原注は、始めその冒頭の 6 行が 131 ページの下部に印刷されている。次の 12 行が 132 ページの下部に印刷され、'O Thomas! Thomas!' で終わるかと思いきや、133 ページには 'If the reader has the curiosity to see . . .' で始まるパラグラフが、1 行目をインテンドされて 4 行にわたって付け加えられているのだ。つまり、初版では、原注は延々 3 ページにわたって記されているということになる。先に見たフロリダ版やペンギン版では原注は 2 ページにわたっていたので、それよりも多くのスペースが割かれているということになり、読む者に与える印象はそれだけ強いものとなる。

ここで指摘すべきは、初版では、フロリダ版と同様に、原注の最後の文言である、'it is as follows.' の後には何の夾雑物もなく、すぐ次のページの冒頭から Memoire が始められていて、つながり具合が完璧であるという点だ。こうして

みると、現在比較的簡単に入手可能な諸版のうちでは、やはりフロリダ版のみが理想的なレイアウトを取っていると結論づけることができよう。さらに、初版を見て分かったことは、フロリダ版では原注の最後の３行が１行あけて印刷されていたことの理由である。それは、単に注を見やすくするためなのではなく、この３行が初版ではそれまでの部分とは別のページに印刷されていたことを暗に反映してあったということである。

ここで、現代の諸版にはなく初版のみに見られる特色を一つ指摘したい。それは、先に述べた版形の小ささとも関係するのだが、Memoire の全体がちょうど１ページにうまく収まっているということだ。Memoire の分量が初版の 134 ページの１ページを占めてそれ以上でもそれ以下でもないのは、収まりが大変良い。現在の諸版においては、版形がこれより大きく１ページあたりの文字数が多いので、Memoire より前か後のいずれかの部分、またはその両方が、Memoire と同じページに印刷されることとなってしまい、Memoire だけがちょうど１ページに収まるということはなかなか起こり得ないであろう。これに対して Réponse はと言えば、初版でも４ページ強の分量があり、ページの最後（最下行）ではなく、ページの途中で終わっていて、Réponse だけで数ページを占めるということにはなっていない。これは致し方ないところだろう。ただし、初版では Réponse の表題は、Memoire の表題と同様、ページの最上部に位置している。新たなページをめくると新たな種類の文が始まるという点では Réponse も Memoire も同様なのである。

Ⅳ

以上見てきたように、原注のレイアウトは、多く版の場合、作者の思惑通りには行かないことになってしまう。その理由を考察してみよう。横書きの洋書においては、文字を印刷する際には、ページの左上から始めてそのページの右下に至ると、次のページに書き次がれて行くが、その際もまた、ページの左上から書き始めてそのページの右下へと至る。これが延々と繰り返されていく。本文に注が挿入される際は、通常脚注の形を取る。本文中の注をつけるべき箇所にアステリクスや注番号が打たれていて、そこから同じページの下部に注が印刷されるのが通例だ。われわれが本を読む際は、本文、注、本文、注、という流れが（場合によっては注を適宜読み飛ばしつつ）、繰り返されることになる。注を見終わった後にはわれわれは本文に戻るが、その際、戻って行く箇所はどこかといえば、本文を読み飛ばさないようにするためには、通常は注があったその場所に、厳密には、アステリスクの打たれた直後の本文に、われわれは戻って行く。

ところが、われわれが本論で扱って来た原注は、少し変わった特徴を持ってい

る。通常の注では、それを見た後は本文の同じ場所に戻れば良いのに対して、問題の原注では、最後の文言が 'it is as follows.'（それは次の如くである。）となっているため、同じ箇所に「戻る」のではなく、Memoire に「進む」ように指示されているのである。ところが、その Memoire はと言えば、'It is terrible misfortune' で始まるパラグラフと、'I wish the male reader has not . . .' で始まるパラグラフとの、本文の二つのパラグラフを間に挟んだその後に置かれている。つまり、原注の指示に従えば、読者はこれら二つの本文のパラグラフを一旦は読み飛ばさねばならないのだ。仮にもしこれら二つのパラグラフがなかったならば、事情は比較的単純であっただろう。'—But here comes my fair Lady.' のパラグラフを読み終わって後、原注を見、その次には通常通り本文に戻るとともに、次の本文パラグラフ、即ち Memoire を読み始めるという、極めて自然な流れで読めば良いだけのことになるからだ。

ただし、もしそうであっても、原注を脚注とするという慣例に従う限りは、根本的な解決は得られないだろう。なぜなら、'—But here comes my fair Lady.' のパラグラフが終わってその直後（直下）に脚注を常に印刷できるとは限らず、さらに次の本文パラグラフ、即ち、この場合だと、Memoire の始めの部分をも続けて印刷しなければならないこともあり得るからである。言い換えれば、脚注の直後に Memoire を印刷するためには、脚注のあるページのすぐ次のページの冒頭から Memoire を印刷し始めることが必要なのだ。だが、'—But here comes my fair Lady.' のパラグラフが、それが印刷されてあるページのどこで終わるかは、そこに至るまでの本文の分量の多少によることであり、全く予測のつかないことだ。極端な場合は、ページの上の方で '—But here comes my fair Lady.' のパラグラフが終わってしまい、原注である脚注との間にあってはならない空白が生じてしまうということもあり得る。脚注の形式を取る限り、原注のレイアウトがうまくいかないのは、実は不可避的なことだと言えるのだ。そのことを考えるにつけても、初版とフロリダ版は大変希有な例だと言わざるを得ない。

V

では、邦訳の『トリストラム・シャンディ』の場合はどうなっているだろうか、参考のために調べてみよう。現在筆者の手元にある版は３種類、朱牟田夏雄訳の岩波文庫版、その前身である筑摩書房世界文学大系版、そして綱島窈訳の八潮出版社版だ。[8] まず、岩波文庫版を見てみよう。第 20 章の第３パラグラフは「もし私の母がカトリック教徒でしたら、奥さま、そういう論理は成立しないわけです。」で終わり、「す」の字の右下に星印が打たれている。第４パラグラフ「この私の著作にとって・・・」、第５パラグラフ「私は男子の読者ならば・・・」を

経た後に原注が置かれている。原注の本文は、星印の後、「ローマカトリック教会の儀典書は、危急の際における出産前の子供の洗礼を指令しています」で始まり「何ということです、トマスさま！　トマスさま！」で終わるパラグラフがあり、その直後に、「もし読者が、ソルボンヌの博士たちに提出せられたこの注射による洗礼についての質問書――ならびに博士たちのこれに関する協議、を御覧になりたい好奇心を持たれるなら、それは次の通りです。」との短いパラグラフがある。原注が終わって次の頁（114ページ）をめくると、そこには「ソルボンヌの博士たちに提出せられたる覚書」の表題以下「覚書」が記され、同じページの中程からは「回答」がこれに続く。本文から原注、「覚書」、「回答」に至るつながり具合はとても良い。

世界文学大系版も、本文から原注、「覚書」、「回答」に至るつながりの良さの点では基本的には同様である。[9] ただし、この版では各ページが3段に組まれているのだが、原注の部分は本文よりほんの少しポイント数の少ない活字で組まれていて、その各行がわずか1字分のみの字下げがされているだけであるため、原注と本文との区別があまり明瞭ではないことが難点と言えば難点である。せっかくの原注があまり目立たないことになってしまっているのだ。

綱島訳ではどうか。第20章の第3パラグラフは「母がカトリック教徒ならこんな結論は、ねえ、奥さん、出てくるわけわけがないでしょう。」で終わり、このすぐ下に（注1）と書かれている。第4パラグラフ「現にこの私の本にとっても・・・」、第5パラグラフ「ご婦人の読者には先刻ご注意申しあげたが、殿方のほうは・・・」を経た後に1行空けて（注1）として原注が置かれている。原注の本文は、「カトリックの儀式では」で始まり「トーマスさま！　トーマスさま！」で終わるパラグラフに、「ソルボンヌの博士たちに提出せられた」で始まり「次にかかげるのがそれである。」で終わる短いパラグラフが続く。原注が終わって次のページ（65ページ）に進むと、そこには「ソルボンヌの博士諸賢への覚え書」が始められている。前記の朱牟田訳と同様、つながり具合が大変良い。

このように邦訳書ではいずれも、原注の末尾から「覚書」に至る流れに支障がない。その理由は以下の事実による。以上の訳書はいずれも縦書きであり、行は上から下へ書かれている。各ページは、ページの右上から書き始められて左下に至る。ページをまたぐ際も各行を上から下に書いて行く流れはそのままであって、文がどこでページをまたごうが関係ない。読者の読む視線は、ページが変わる際でも、同一ページ内の改行と同じ程度の距離を動くに過ぎない

これ対し、洋書の場合は、横書きであり左から右へと書かれている。各ページは、ページの左上から書き始められて右下に至る。ページをまたぐ際、各行を左から右に書いて行く流れはそのままであるが、和書とは1点大きく異なる事象が

起こる。それは、あるページが終わって次のページに進む際、文を読む読者の視線はページの最下部の行末から次のページの最上部の行頭まで大きく移動しなければならないのだ。

和書の場合は、上記の各訳書に見られたように、注を挿入する際は、本文の間のパラグラフの切れ目のところの適当な場所に挿入すれば良い。また、注が終わった後に本文を再開するだけで、注と本文とは自然につながるであろう。ところが、洋書の場合は、脚注という形式を取るので、本文の間のパラグラフの切れ目のところにうまく注を置くことが常にできるとは限らない。また、注の終わりは常にページの最下部になるはずである。注の終わりから本文に流れ良くつなげるためには、再開する本文は次のページの最上部の1行目から始めなければならないが、先に述べたように、そういうことは常には起こりにくいことであるのだ。つまり、洋書の場合の不具合の原因は、突き詰めて言えば、脚注という形式にあるとさえ言い得るのである。[10] そうした形式を取りつつなお流れの良い初版のレイアウトは、決して偶然の産物ではなく、作者スターンが、苦労に苦労を重ねて得られたものとして後世に誇っても良い事柄なのではないかと思うのである。

VI

以上をまとめると、原注の末尾の文言から Memoire と Réponse へのつながり具合に関しては、作者の当初の意図が初版に反映されているとすれば、その意図通りにレイアウトが施されている現在の版はフロリダ版のみであって、他の多くの版においてはその意図は実現されていないということが分かった。そもそも小説の中に原注があるという事実からして大変珍しいことであるだろう。それも、われわれが問題にした原注は、その質、量ともに他には見られないようなものであった。『トリストラム・シャンディ』に限って言えば、これに匹敵するのはわずかに第4巻 第10章の原注が挙げられるくらいである。この注は、リケトスなる者の胎児であった際の状態に関する補足的説明として挿入されているに過ぎず、本文とのつながり具合をあえて問題にする必要のないものである。それに対して第1巻 第20章の原注は、単なる注ではなく、少しだけ小さい字で印刷された本文ではないかとさえ思えるものだ。もしそうであれば、この原注が脚注として印刷されている初版の 131 ページから 133 ページにかけての3ページは、その上半分と下半分において、2種類の本文が同時並行的に進んで行っているということになる。あたかもある種の実験小説のような外観を呈していることになるのである。[11]

こう考えてくると、初版において Memoire の全体がちょうど1ページを占めているのは偶然によることではなく、作者の計算でそうなっているのではないか

と思えてくる。つまり、作者は、Memoire の分量が自分の作品のちょうど1ページ分くらいの分量であることに着目し、そこに至るまでの本文と原注が、ともに直前のページでちょうどぴったり終わるように案配したのではないか。そしてその結果、Memoire はページの途中からではなく、うまくページの1行目から始まることになったと考えられるのである。特に初版の 133 ページの下部におかれた4行の原注、'If the reader has the curiosity to see the question' で始まり、'it is as follows.' で終わる原注が、これを物語っている。この4行を挿入することで 133 ページはその全体が活字で埋まる。それとともに、133 ページの最後の文言、すなわち 'it is as follows.' から 134 ページの Memoire へと自然につながることが可能になるのだ。仮に、このことが偶然ではなく、作者の当初の意図としてあったとするならば、フロリダ版を含む現行の版は、いずれの版においても、この作者の配慮と計算を見過ごして来てしまったと言う他ない。

上記のように Memoire は、初版ではちょうど1ページに収まっている。つまり、Memoire の表題はページの最初の行にあり、その表題に付く別の原注である、*Vide Deventer, Paris Edit. 4to, 1734, p.366. がページの最後の行にあるということである。Memoire がちょうど1ページに収まっていることによって、次の Réponse もまたページの1行目にその表題がおかれることになっている。これは見た目にも大変すっきりしていて具合が良い。仮に Memoire の本体の活字が作品の本文と同じ大きさの活字ではなく、それより小さい原注の活字と同じ大きさの活字で組まれていたら、こうはなっていなかったであろう。原注を挿入するという配慮によって Memoire の始まりはページの最上部におくことができたとしても、Memoire の本文で小さい活字を用いていたならば、Memoire はページの最下部に至る前に終わってしまい、同じページの下の方で次の Réponse を始めなければならなくなってしまったであろう。Memoire の活字の大きさが本文のテキストと同じである理由は、それが注の一部ではなく、本文として作品中に立派に存在しているからだ、という趣旨のことを先に述べたが、存外このような技術的なことも、理由の一つとして挙げられるのではないだろうか。

結び

『トリストラム・シャンディ』という作品の特質は、書物としていろいろな工夫が凝らされた点にある。それらの工夫の中では、他に大変目立つ要素が多く存在する。われわれが扱って来た第1巻 第20章中の原注は、多少目立たないものであるため、従来見落とされて来た可能性が大きい。本論は、この原注も作者の書物に対する創意工夫の一つとして数えようという試みである。

残る問題は三つある。一つは、本論で取り上げた現代の版はこれが全てでない

ことである。フロリダ版以外にも作者の意図通りにレイアウトがきちんとなされている版がないとは断言できない。ただ、そのような版はもし存在しても、その数はあまり多くはないだろうということは容易に推測できる。今後、いろいろな『トリストラム・シャンディ』を見る際には、その第1巻 第20章の原注のレイアウトに注意していきたい。もう一つは、フロリダ版が作者の意図通りのレイアウトを取っているとしても、それはその版の編集者が考えた結果なのか、それとも偶然そうなっているに過ぎないのかという点だ。この点に関しても、今後追求していく必要があるだろう。そして、最後に電子的なテキストの扱いが課題として残されている。近年、文学テキストを電子的に扱うことが一般的になって来ており『トリストラム・シャンディ』も例外ではない。本論では、初版こそインターネットで閲覧したものの、実際には、その他の版を含め、旧来のいわゆる紙媒体のテキストのみを扱って来たことになる。今後、電子的なテキストで原注の扱い方や、その他の特徴的な要素がどのようになっているかも考察してみたい。電子テキストの普及によって、テキスト分析などに便利が増した反面、一般的には書物を物として見るということに関しては、逆に疎かになって来ているのではないだろうか。特に『トリストラム・シャンディ』のような作品は、紙に印刷され製本された「書物」として眺めてこそ、読む者にとって多くの物が得られる類の代表と言っても良いのではないかと今は考えている。

注

1. Lawrence Sterne, *Tristram Shandy,* Vol. 1, Ch. 20, p. 64. テキストは、*The Florida Edition of the Works of Lawrence Sterne 1: The Life and Opinions of Tristram Shandy, Gentleman,* ed. Melvin New and Joan New, (Gainesville: Univ. Presses of Florida, 1978) を使用し、以下この作品からの引用のページ数は本文中の括弧内に示す。また、日本語訳は、朱牟田夏雄訳の岩波文庫版『トリストラム・シャンディ（上)』(1969年、岩波書店）及び、綱島窈訳『トリストラム・シャンディ』(1987年、八潮出版社）を参照し、適宜改変して用いる。
2. 朱牟田夏雄訳『トリストラム・シャンディ（上)』(1969年、岩波書店)、385頁。
3. Sterne. *Tristram Shandy: An Authoritative Text, the Author, Criticism.* Ed. Howard Anderson. New York: W. W. Norton, 1980.
4. Sterne. *Tristram Shandy.* 1912 ; New York: Alfred A. Knopf, 1991.
5. Sterne. *The Life and Opinions of Tristram Shandy, Gentleman.* Ed. Ian Campbell Ross. Oxford: Oxford UP, 1983.

6．Sterne. *The Life and Opinions of Tristram Shandy, Gentleman.* ed. Melvin New and Joan New. London: Penguin Books, 2003.

7．ここで初版というのは1760年のロンドン版の初版を指す。前年の1759年にヨークで出たのが初版であるので、厳密には第2版と言うべきである。http://books.google.com/books?id=COoNAAAAQAAJ&hl=en（Google Book Search）を参照。

8．いずれの版も縦書きであるが、本論では横書きに直して表記する。

9．『リチャードソン／スターン』世界文学大系 76（1966年、筑摩書房）、348頁を参照。

10. もっとも、本論のように注をすべて尾注（後注）とする方法もある。ただし、その場合は、注を本文中に「挿入」することにはならないであろう。

11. 具体的には、筒井康隆の「デマ」（『ＳＦマガジン』1973年2月号初出）のような実験的な作品を念頭に置いている。